

# 1980年代イギリスのモッズにとっての 60年代のモッズと商品

尾山 晋

## はじめに

1960年代半ばのイギリスでは、モッズ (mods) と呼ばれる若者の服装や、彼らの愛好する音楽——細身のスーツや、モダン・ジャズ、R&B といった——が流行した。66年頃にはサイケやフォークの人气が高まり、モッズの流行は終わるが、70年代末から80年代にかけて、その服装や音楽が新たな若い世代の注目を集め、リバイバルのブームになった。その中で若い世代のモッズの一部は、60年代の流行の後で70、80年代の人々が見向きもしなかった古い商品を蒐集していた。

本稿はカルチュラル・スタディーズ (以下「CS」) のサブカルチャー論の流れを念頭に置きながら、80年代半ばにおいて若いモッズが、60年代の商品やモッズをどのように語ったかに注目する。そして80年代モッズの一部による蒐集行為の社会的意義を考察し、それにより、商品の消費を伴うサブカルチャーにどのような意義があるのかという議論の発展に寄与したい。具体的には80年代中頃にイギリス各地のモッズが編集していたファンジン<sup>1</sup>と呼ばれる同人誌を一次資料として取り上げ、補足として、筆者による80年代モッズへの聞き取りやジャーナリズム文献も参照する。

以下本稿における「80年代モッズ」という言葉を次のように定義する。すなわち、50年代末から60年代半ばの生まれで、60年代にはモッズとして見なされる行為をしておらず、70年代後半から80年代にモッズに関心を持ち、モッズと見なされる行為をするようになった世代の人々を指して「80年代モッズ」とする。

本稿の構成は以下の通りである。第1節はイギリスを中心としたCSにおけるサブカルチャー論を振り返り、一つの重要な論点を指摘する。第2節は60年代のモッズと70年代末以降のリバイバルについて概観し、一つの問題を設定する。その問題を検討すべく、第3節は80年代のファンジンにおける記事を取り上げ、最後にそれらを総括する。

## 1. CSにおけるサブカルチャー

モッズやパンクといった、商品の消費——服装や音楽など——を伴うサブカルチャー<sup>2</sup>にどのような意義があるのか。これはCSで議論を呼んできた重要なテーマだ。

バーミンガム学派 (Birmingham School、以下「BS」) として知られるステュアー

ト・ホールやディック・ヘブディジらは、サブカルチャーに政治的な「抵抗」の可能性を探った。彼らは、文化人類学で研究対象となる人々が、商品を元の用途と異なる仕方や組み合わせで使うことを指すブリコラージュという概念を、サブカルチャー分析において参照した。彼らは、安全ピンを服飾に用いたパンクスのように、サブカルチャーの担い手たちの行為には、商品に付された意味を変えるブリコラージュの側面があると指摘し、社会における支配的な価値や意味の体系を「攪乱」しうる抵抗として評価した (Hebdige 104)。BS の議論は、同時代の社会状況——イギリス経済の衰退に伴い、「移民」や「若者」の行動が「ネーションの危機」の表れとして否定的に語られ、様々な立場にある人々の生活が、国家により統制されつつある状況——の中で政治的な意義があったと思われる。

その一方 BS の議論には批判も多くある。例えば、批判派の一人サラ・ソーントン (Sarah Thornton) は、「サブカルチャー＝支配的文化への抵抗」という「図式」を疑問視する。ブルデューの「界」(champ) という概念を参照しながら、彼女はサブカルチャーを、一定の価値観がその参与者たちに共有され、自律性を持った社会空間と見なす (9)。そして彼女はサブカルチャーの「界」が、「高級文化」と見なされる物や知識を持つ人々の「界」と対抗関係にあるとは見ない。彼女は音楽や服飾に関する知識の豊富な人々が、同じ「界」における他の参与者より優位にあることに注目し、異なる「界」の間より、むしろ「界」の参与者たちの間に文化資本——参与者の所有する物や知識——の多寡による階層関係があると指摘する。<sup>3</sup> またヘブディジが政治的な抵抗として評価したパンクの、実際の担い手としての経験を持つデヴィッド・マグルトン (David Muggleton) も、BS 批判で知られる。彼は、サブカルチャーの担い手たちの「主観」においては、政治的な事柄への関心は低く、BS の論者たちがサブカルチャーに「抵抗」を期待したことが問題だという (167)。

このような議論を経て、CS のサブカルチャー論は一つの重要な問題を抱えている。BS による議論の政治的意義は評価すべき一方、エスノグラフィー重視でサブカルチャーの「内情」に通じた BS 批判派の議論にも説得力がある。しかし、それでは、よりよい生活や社会変革の可能性をサブカルチャーに探ることはナイーブなことだろうか。アカデミー外の人々が、サブカルチャー的な行為に、よりよい世界への可能性を見出すことを、我々は期待すべくもないのだろうか。仮にサブカルチャーを、他の「界」とは対抗関係にない「界」と見なすとして、それならば、CS はサブカルチャーの様相を単に記述するだけでよいのだろうか。

こういった問題意識から、商品の流行が一度終わった後に人々がそれらをどのように扱うかに注目することは、決して無意味ではない。商品の意味を変質させるサブカルチャー的行為が、同時代の支配的な価値システムを「攪乱」しうると見た BS や、

その批判者の一部も継承した「プリコラージュ」の議論は、価値体系の同時代的な存在を前提してきたように思われる。商品の消費が社会的な価値体系の「攪乱」たりうるためには、それによって「攪乱」されるどころの支配的な価値体系が、同時代的に存在しなければならない。そのため、商品の流行が終わった後に人々がそれをどう扱うかということは、BSやBS批判の議論においてあまり関心と呼んでこなかったのではないだろうか。

流行の終わった商品について考える時、思い起こされる事象の一つがリバイバルだ。一度流行の終わった商品やサブカルチャーに人々が再び関心を寄せるリバイバルには、過去の商品やそれらの特徴的なデザインを、それらが元々置かれていた文脈から切り離し、他の文脈におくという特徴がある。サブカルチャーのリバイバルは珍しくなく、それは20世紀の後半だけを見ても、しばしば「レトロ」を宣伝文句にした新しい商品の消費となってきた。BSの一人であったイアン・チェンバース (Iain Chambers) は、1987年に現代の先進国の都市一般について論じた中で、リバイバルについて次のように言った。時間軸が失われたかのように、過去の様々な商品のモチーフが共存する「ポストモダン」な現代において、「リバイバルとは歴史的なモメントを再発見し、正確に引用するというものではなく」、「むしろ現代のタイムレスなワードローブの一部をリサイクルすること」(2) だと。<sup>4</sup>つまりサブカルチャーのリバイバルにとって、過去の引用という意義は失われつつあると。また最近では美術史を専門とするエリザベス・ガフィ (Elizabeth E. Guffey) による、1960年代のオール・ヌーボー・リバイバル以降の、米英における複数の事例を取り上げた研究がCSで関心と呼んだが、彼女にもチェンバースに近い認識が見られる。彼女は、1960年代末以降のテッズ・リバイバルにおいて、元のテッズ世代とリバイバル世代が同じ商品を消費する状況に言及し、「サバイバル [50年代の世代] とリバイバルが曖昧になり、リバイバルのサイクルも短くなるにつれ、リバイブされた過去が現在になり始めた」(105) と言う。

リバイバルに関するこれらの議論には一定の説得力があるが、見落としている部分もある。ガフィなどが、流行の過ぎた商品と人々との関わりについて、あまり注意を払っていない事象が蒐集家、つまりコレクターたちだ。ガフィは蒐集家についていくらか言及しているが、彼女の中心的な関心はむしろ映画『アメリカン・グラフィティ』のようなリバイバルの商品や美術にある。また先ほど触れたソーントンにおいてはレコード蒐集家への言及があるが、それはコレクションの質や量が、「界」の中で文化資本になるという指摘にとどまっている (27)。

BSや、ここまで言及したその他の論者たちの議論では、蒐集家の事例に関心があまり払われてこなかったが、蒐集家たちは一度時代遅れになった商品を、元の価値体系とは別のコレクションという文脈の中に位置づける人々として注目される。例えばア

アメリカにおけるポピュラー音楽の研究者ジョン・ドゥガン (John Dougan) は、1960年代のブルーズ・リバイバルとそれを後押ししたレコード蒐集家たちに注目する。彼は、ブルーズ音楽をアメリカにおいて音楽的な評価の対象として正典化したレコード・コレクターたちを、「見捨てられていたブラック・アメリカのヴァナキュラーな音楽を救い出した」と評価する (60)。しかし彼のこれまでの論考では、正典化を含めた蒐集家の行動については詳述されているが、蒐集物に関する蒐集家の言動、つまり彼らが1960年代においてブルーズにいかなる意味を与えたのかについては詳しい議論がない。

こういった関心から、本稿で取り上げる1970年代後半以降のイギリスにおけるモッズ・リバイバルは、CSのサブカルチャー論にとって注目すべき事例を含んでいると思われる。80年代半ばの若いモッズの言動を見ると、彼らが蒐集していた60年代の商品について語りつつ、60年代モッズの消費行動に、よりよい生活への志向を見出し、さらにそれを80年代において実現すべきものとして位置づけている事例がある。80年代半ばにおける彼らの言動は、60年代における商品の価値体系や意味システムの「攪乱」とはなりえないが、マグルトンの重視した「主観」——ここでは80年代モッズの「主観」——において、60年代のモッズの消費行動は、よりよい「ライフスタイル」を発展させたものとして語られていた。それらの事例は、サブカルチャーや商品の消費一般がどのような社会的意義や可能性を持ちうるのか、という問題に一つの示唆を与えてくれるように思われる。モッズ・リバイバルについての研究は管見の限り殆どないが、ピッツバーグ大学所属のクリスティン・フェルドマン (Christine Feldman) による、主にアメリカでのモッズ・リバイバル世代の事例を取り上げた論考がある。彼女の論考は、21世紀にリバイバル世代が60年代モッズについて肯定的に語ることに注目するもので、本稿の内容と大に関わりがあるので、次節以降で取り上げる。

## 2. 80年代のモッズによる60年代の商品の蒐集

冒頭で触れた通り、モッズとは1960年代においては、一定の商品を消費する若者を指す表現だった。「モッズ」、あるいはその単数形である「モッド」という言葉は、モダン・ジャズのファンを指す「モダニスト」の短縮形であり、彼らの間では細身のスーツやイタリア製のスクーターなどが「モッド」らしいものとして人気を得た (Barnes 8-9; Rawlings 49-50)。モッズがマスメディアで広く取り上げられ、語られるようになると、様々な商品がこの「モッド」という言葉と結び付けられ、この言葉が最初に担っていた意味内容は希薄になる。60年代後半からジャーナリストとして活躍するニック・コーン (Nik Cohn) は、この言葉が「広告業者の手の中で、何にでも使われる便利な形容詞になった」(142) と回想する。当時のイギリスは経済が衰退し、人種差別

といった問題が社会に深刻な影を落としていた一方、それらから目をそらすかのごとく、政治の言説ではハロルド・マクミラン首相による「人々の暮らしがこれほど良かったことはなかった」というフレーズが頻繁に用いられた。モッズは深刻な社会状況を改善するために積極的に関わることはなく、商品の消費に余暇を費やした。

モッズの流行は66年以降に廃れるのだが、70年代末にリバイバルを迎える。70年代後半になると、ごく少数ではあるが、60年代のモッズや商品に関心を持つ若い世代が現れ (Verguren 19)、60年代モッズをテーマにした映画『さらば青春の光』(Quadrophenia, 1979)の発表以降、商業ベースに乗ったリバイバル・ブームが到来した (Verguren 12, 19; Rawlings 164)。<sup>5</sup>各地のクラブではモッズをテーマにしたイベントが催され、地元のモッズが編集したファンジンも売られた。80年代モッズの中には、後で詳しく見るように、60年代の服やレコードを集めるものもいた。大量に売り出されたリバイバルの商品が広く若者の人気を得ると、60年代のモッズそのものにこだわる者たちの中には、これをネガティブに語る者もいた。60年代モッズの音楽や服装に関する情報や物を多く持っている人々が、そうでない人々に対し影響力を持つという点では、前節で触れたソーントンの「界」の議論は、80年代モッズに関しても妥当する面がある。

この時代においてもイギリスは様々な社会問題を抱えていたが、80年代モッズの間で社会的な問題に関心が高かったのかは疑問だ。長引く不況で80年代前半には、イギリスの失業者数は戦後最大に達している。また81年4月にはロンドン市内ブリクストンで、住民と警察の緊張の高まりから暴動が起き、各メディアは大きく取り上げている。しかし基本的にモッズの間では、社会問題への関心は高くなかったと思われる。本稿で取り上げる80年代半ばのファンジン誌面では、モッズの話題が社会的な問題と結び付けられることはあまりない。むしろマグルトンがパンクなどについて指摘したような政治的関心の低さの方が、より実態に即していたようだ。<sup>6</sup>

80年代モッズに関しては、白人だけでなくアジア系やアフリカ系のモッズがいたことなども興味を引く点ではあるが、<sup>7</sup>本稿で注目したいのは60年代製の商品や情報の蒐集だ。当時のファンジンの誌面を見ると、80年代モッズが同時代のリバイバルの音楽や新品の服を購入していたことも確かだが、その一部は同時に60年代モッズに関する情報や商品も事細かに蒐集していたことが分かる。例えば、60年代のモッズ・バンド、スモール・フェイセズのファン・クラブ会報の内容が掲載される場合もあれば (“Small Faces: Personal Files” 15)、そのスモール・フェイセズのヒット曲「オール・オア・ナッシング」と曲名が同じだが、全く別の60年代のバンドによる、メロディも歌詞も異なる珍しいシングル盤のレビューもある (Quito 5)。また60年代モッズに人気のあったアメリカのレコード会社、スタックスの歴史に関する記事もあり、同社が青少

年の学校離れ対策キャンペーンの一環で出した、入手困難なアルバム『ステイ・イン・スクール』が言及される。オーティス・レディングらが参加したそのアルバムが出された時に、同社の社屋の上に掲げられた「学校にしよう。ドロップアウトになるな」と書かれた看板が、いたずらで子供が投げた石で壊されたことも記されている（“The Stax/ Volt Story” 8）。

80年代モッズの蒐集行為は、知識だけでなく実際の物にも及ぶ。彼らの中には、チャリティ・ショップ<sup>8</sup>や各種の中古物品を扱う店で、60年代製の中古品やデッド・ストックの商品を探し回る者たちがいた。例えば筆者とコンタクトがあり、当時の状況をよく知るイースト・ロンドン出身の80年代モッド（仮名「トニ」）は、スーツをオーダーしたテーラーの他に、服を探していた場所について回想する。<sup>9</sup>

70、80年代は、店で売っていたファッションは本当にひどくて、3ボタンのスーツなんて、どこに行っても手に入らなかった。みんな1ボタンで、確かダブル・ブレスト]でラベルの広いスーツを売っていたよ。広いラベルは70年代のファッションでその頃すごく流行っていたと思う。だから僕らが行く場所は主にチャリティ・ショップ、古い服を売っているチャリティ・ショップだった。[……] 他には、誰も行かないような、すごく古い紳士服屋なんかも探していた、[……]。そういう店では60年代のオリジナルの古い服をまだ売っていたんだ。[……] そういう店は見つけにくくて、店を一つ見つける度に、みんな内緒にしていた。そういう店はすごく小さくて、在庫[supply]も限られていたから、誰も自分がどこでとっておきの服[surprise]を見つけたかは、他の奴には教えなかった。[……] [デッド・ストックを見つけた時の気分は]まず、嬉しかった。その次に「内緒にしておこう」、「誰にも教えなくておこう」だった（トニ、男性、ロンドン出身）。

上の発言に関しては、80年代初頭にリバイバルのブームで、60年代風の新品の服が実際に売られていた事実を差し引いて考えなければならないが、このように、80年代モッズの中には、60年代に売られていた商品を熱心に集めるものたちがいた。彼はこの後、コレクターの集まるレコード市に友人と通ったことや、父親の古い3ボタンのスーツを自分用に仕立て直したことについても語っている。

こうした80年代モッズの蒐集行為は、パリのバサージュ研究で知られるヴァルター・ベンヤミンの、蒐集家に関する思索を思い起こさせる。CSでは複製技術時代における芸術作品のアウラ喪失に関するベンヤミンの議論が頻繁に参照されてきたが、彼は商品の「新しさ」が追求される資本主義社会で、時代遅れとなり誰も見向きもしない商品を蒐集する人々にも注目していた。<sup>10</sup> 商品は新しく売り出されると、最新の機

能やデザインを持つものとして、有用性を基準とした商品の価値体系の中に置かれる。新しい商品が売り出されれば、人々は単調な労働からの気晴らしや、現在置かれている状態より少しでもよい生活を望んで、それを手に入れようとする。商品は人々によりよい生活への欲求を抱かせるが、より新しいデザインや機能を備えた次の商品が出てくれば、誰にも見向きされなくなり、ベンヤミンの表現を用いるなら、「廃墟」と化する。「廃墟」は、さらなる新しい商品の出現で、うず高く積みあがる（ベンヤミン、1969、119）。そして、よりよい生活を望む人々も資本主義のシステムの中にいる以上、「新しさ」と「進歩」重視の価値体系の中で考えざるをえず、自分たちの抱く望みを意識することはない——人々の意識は最新の機能や有用性の方にある。この望みは、商品が「廃墟」と化した時に意識することが可能になるが（Buck-Morss 212）、より新しい商品が発表されれば、人々は新しい商品に向かう。

ベンヤミンは「廃墟」となった商品に、かつて人々が意識せずに抱いたよりよい生活への望みを救い出すことを、蒐集家の行為に見出そうとした。彼によれば、古くなった商品の蒐集家たちは、かつてそれらが置かれていた、他の商品と共につくる価値体系から引き離し、商品を蒐集品に変え、他の蒐集品とから成るコレクションという新たな体系に組み入れる（ベンヤミン、2003、2: 15）。この蒐集行為は「物から商品としての性格を剥奪」し、実現しえたかもしれないが、人々に意識されることなく結局は潰えてしまった、よりよい世界への可能性を救い出す。

[蒐集家は] 物から商品としての性格を剥奪する。[……] だが、彼は使用価値の代わりに、愛好家にとってそれらが有する価値を物に授けることしか出来ないだろう。蒐集家は、はるか彼方の、死滅した世界だけでなく、それと同時によりよい世界を呼び起こすことを好む。[……] 物が有用性という隷属から解放されているような世界だ（ベンヤミン、2003、1: 47）。

このように蒐集家は廃品となった古い商品を前に、かつてそれらが人々に抱かせた、よりよい生活への望みに想像を及ぼし、かつては商品としてしか見なされなかったものに、商品として以外の意味を見出す人々として注目される（Buck-Morss 241）。

前節で言及したフェルドマンもモッズのリバイバル世代について、60年代のヴィンテージ商品の蒐集にも若干言及しつつ、(44-5)「過去の世界だけでなく、よりよい世界にいることを望む」ベンヤミン的な蒐集家と「似ていなくはない」(123)と評している。しかし同時に、彼女はボードリヤールを参照し、現代は実際の物や出来事に触れることなく、我々が世界について映像などの媒介——アウラを喪失させる複製技術により可能となった——を通じて理解する状況だとし、次のように述べる。「主に媒介さ

れた経験（『さらば青春の光』[のような]）を通じた[60年代]モッズの理解によって、彼ら[リバイバル世代]は、映画を通じた70年代からの、モッドな60年代についての語り直し[retelling]をシミュレートするのだ。[……][媒介を通じた]理解において、我々にはオブジェクトのないイメージが残され、そこで新しい意味が作り出されなければならない」（124）。フェルドマンの考察で念頭に置かれているのは主にリバイバル世代が置かれた21世紀の状況であり、本稿の80年代モッズのそれと同じではないが、彼女の解釈で強調されるのは、リバイバル世代の行為が、『さらば青春の光』のような70年代に語られたモッズ像のシミュレートであるという点だ。確かに80年代モッズにとっても、70年代に語り直されたモッズ像の影響は強かった。例えば、60年代世代のリチャード・バーンズによる1979年発表の写真集『モッズ!』は、80年代モッズたちに広く読まれ、彼らの60年代モッズに関する理解に多大な影響を及ぼした（Verguren 12, 19）。80年代モッズが60年代を解釈し、それを演じるというフェルドマンの主張は適切だ。しかし、本稿で取り上げる、実際の古い商品を集めていた80年代モッズにとって、60年代のモッズが「オブジェクトなきイメージ」だったと言い切ることはできないだろう。

80年代モッズの一部は時に「誰も行かないような」場所で、60年代のモッズに関する商品を蒐集していた。では80年代モッズは、蒐集した60年代の商品を前にして、60年代モッズが抱いた何らかのよりよい生活への望みを見出し、そして呼び起こしたのだろうか。つまり、蒐集された商品は、60年代のモッズたちによりよい生活への望みを抱かせたものとして、80年代モッズに認識されていたのだろうか。次節では80年代のファンジンにおけるモッズの発言をもとにこの問題を検討したい。もちろん、ベンヤミンにおける蒐集家と、60年代の商品を蒐集していた80年代モッズは同一のものではなく、両者を同一視することが本稿の目的ではないが、ベンヤミンの思索は我々が参照すべき点を含んでいると思われる。またこの問いは、前節で見たチェンバースのように、リバイバルにはもはや過去の引用や歴史的なモメントの再発見という意義は失われつつあるという議論の再検討でもある。

### 3. 1980年代のファンジンにおける60年代モッズたちの表象

本節では80年代モッズが、60年代の商品やモッズについてどのように認識していたかを、80年代モッズのファンジン<sup>11</sup>における記述をもとに考察する。実際には、ファンジン記事での60年代の事物に関する情報は、レコード評を除けば、提示されるだけということが多く、それに関する編集者や寄稿者のコメントおよび発言は多くない。このことはことわっておく必要がある。しかし、それらの記事における60年代モッズの表象には、共通した特徴が見出される。



ファンジンにおける60年代モッズ表象の一つ目の特徴は、その流行が一度は終わってしまったという認識だ。例えば、ロンドン出身の80年代モッズ世代で有名なDJの男性、レイ・マーゲットソン (Ray Margetson) は、自身が編集していたファンジン、『ペイトリオティック』 (*Patriotic*、以下「Pt」) での、ある60年代モッズへのインタビューで、次のような質問をしている。彼はインタビュー相手に「モッズが廃れて [collapsed]、あなたはいつ [モッズとしての生活から] 抜け出したのですか」(15)と聞いている。この「廃れて」という表現からは、60年代モッズの流行が一度は終わったものとして捉えられていたことが分かる。また、コヴェントリで発行されていたファンジン『ヒップスター』 (*Hipster*、以下「HS」) では、女性と思われる寄稿者フィオナ・ウォレル (Fiona Warrell) が、60年代の女性モッズについて書いた記事の中で、「1966年までに [……] モッズ・ムーブメントはコマーシャルイズムの強風にあえぎ、終りつつあった」(15)と書いている。さらに同HS誌では、女性と思われる別の寄稿者が、自分の所有する60年代製のヴェスパ・スクーターについて書いた記事がある。彼女は、自分のヴェスパを「彼女」と擬人化し、「彼女と同じような、もっと今風の親類たち [80年代製のヴェスパ] に比べれば少しだけスピードが遅いにも関わらず、彼女はそれを補って余りあるものを十分に備えている [……]」(Haynes 10)と述べる。ここからも、モッズと関連の深い60年代の商品が、一度は流行を過ぎたものとして認識されていたことが分かる。

60年代モッズ表象の二つ目の特徴は、60年代におけるモッズの消費行動が、新しい生活へと発展したものとして語られることだ。最初の例では、80年代モッズが60年代のレコードを通して、60年代の聴衆がどのようにその音楽を消費したのかを想像し語る様子が見られる。この記事はレスターで発行されていたファンジン『ライフ・アフター'66』 (*Life after '66*、以下「LA66」) の編集者ニコラス・ジョエル・キンチ (Nicholas-Joel Kinch) による、スモール・フェイスズのレコード『オータム・ストーン』 (*The Autumn Stone*, 1969) のレビューだ。彼は「熱狂する女の子たち」 (*Screaming Chicks*) という小見出しをつけ、同アルバム収録の3曲のライブ録音について語る。

このライブ録音は、音質があまりよくないが、聞く価値があるのは確かだ。マリオット [Steve Marriott、バンドのヴォーカリスト] のヴォーカルはレコードと同様に力強いが、当時は女の子たちの叫び声の向こうに [above all the screaming chicks] 聴かなければならなかった。バンドの他のメンバーにしても、彼らは最大限努力していたように思えるし、どうにかして僕も時間を遡って彼らを見ることはできないだろうかと思わせてくれる。こう考えると、またスモール・フェ

イセズのコンサートが実際に録音されていた事実を考えると、僕はイミディエイト [バンドが在籍していたレコード会社] の保管室には、あとどれだけのライブ・トラックがあるのだろうかと考えてしまう。スモール・フェイゼズのライブ・アルバムというのはリリースされるのだろうか。もしそうなれば、素晴らしいものになるだろう！ [……] でも、それまでは『オータム・ストーン』に入った、この3つのトラックがそれに一番近いものなのだ (15)。

ライブ録音中の若い女性ファンたちの歓声に触れながら、この作者の想像はライブ現場における人々の熱狂に及ぶ。さらに後半部分で彼は、このかつて熱狂とともに消費されたが、結局は埋もれてしまった商品を、新たな文脈に置きなおそうとする志向すら見せている。

次に、80年代のモッズが60年代頃に書かれた書物に言及しながら、初期のモッズの生活を「素晴らしい暮らし」として語る事例を見る。<sup>12</sup> この事例は *HS* 誌上の、書籍を推薦する記事だ。この記事では、小説家コリン・マキネスによる1959年発表の小説『アブソリュート・ビギナーズ』 (*Absolute Beginners*) が紹介される。この小説の主人公は50年代末ロンドンのモダン・ジャズ・ファン少年であり、彼のような若者が、初期のモッズだったと言われる (Barnes 8)。同書は次のように描写される。

この本に関して根本的なことは、50年代末に向かっていたロンドンを舞台にしており、10代のジャズ・ファン少年が送っていた素晴らしい暮らしのストーリーを伝えているということだ。モダニスト・ムーブメントの発展を助けた、ジャズ・ファンの若いヒップな奴らの暮らしのことだ——当時のテディ・ボーイのチンピラとは対照的に、シャープなイタリア製スーツに身を包み、モダン・ジャズのクールな音を好んでいた奴らのことだ (A.J.C. 13)。

上の引用では初期のモッズによる、「シャープなイタリア製スーツ」や「モダン・ジャズ」といった商品の消費行動が、新しい「素晴らしい暮らし」の発展につながったという語りが見られる。また前節でフェルドマンが、『さらば青春の光』のような70年代に語り直された60年代モッズ像が、80年代世代に与えた影響の強さを指摘していたことに触れた。しかし上の事例からは、80年代モッズが60年代に書かれたテキストへも強い関心を持っていたことが分かる。

60年代のモッズが、商品の消費でもって「新しい生活」あるいは、それ以前とは違う暮らしを発展させたという語りは、先に言及したウォレルの記事でも見られる。彼女は次のように語る。

初期 [60年代] のモダニスト・ムーブメントでは、大勢の男の子とわずかな女の子たちがいて、彼／彼女らの得意なことは服装へのこだわりだった。それ以前には特別にティーンエイジャーのための服というものはなく、服装は基本的に16歳でも60歳でも同じで、ごく限られた古風なカットと色しかなかった。服装への、この新しいこだわりがさらに進み、全体のライフスタイルに発展したのだ。そのライフスタイルの、クールで清潔に、そしてシャープに見せる素晴らしい技術は今も重要なのだ。[……] テレビが [60年代] モッズに提供するものはあまりなかった——『レディ・ステディ・ゴー』、『アヴェンジャーズ』、『マン・フロム・U.N.C.L.E』といった番組ぐらいだ。これらの番組ではスマートな服装の女性が登場して、男の子たちと同様に、彼女らからモッズの女の子たちはアイデアを得ていたのだ。これは『レディ・ステディ・ゴー』の司会、キャシー・マクゴワンに特にあてはまる。彼女は疑いようもなく、テレビ画面を優美に飾るモッド・ガールの象徴だった (14)。

ここでも、60年代の人々の消費行動がそれ以前になかった「ライフスタイル」と結び付けられている。注目すべきは、テレビの司会者や映画スターといった人々——それらも産業の売り出す商品だ——から、60年代の女性モッズが、それまでになかった「ライフスタイル」のアイデアを得ていたと語られる点だ。<sup>13</sup>

ところで80年代モッズは、60年代の「ムーブメント」が目指した「ライフスタイル」を、どのようなものとしてイメージしたのだろうか。入手できた資料の範囲においてではあるが、一つの重要な点を指摘したい。80年代モッズは60年代モッズ、特に初期のモッズの生活を、若者をターゲットにする各種産業関係者の想像が及ばないものとして語る。先に言及した『アブソリュート・ビギナーズ』の紹介記事では、「[小説の読者である] 我々は、[……] メディアやその他の資本家たちが、ティーンエイジャーをつくり出すことで [manufacturing]、金を儲ける方法を理解する以前のロンドンへの旅に出るのだ」(A.J.C. 13) と述べられる。ここでは初期のモッズの暮らしが、資本家たちには想像のつかない生活として語られる。<sup>14</sup>60年代モッズの行為が、服や音楽といった商品の消費だったことを考えれば、これは幾分ナイーブな物言いに聞こえる。しかし、80年代のファンジンにおいて60年代モッズの行動は、商品の消費であると同時に、産業に支配されない生活への可能性も持つものとして描かれていたことは注目に値する。<sup>15</sup>

さて、最後にもう一つの特徴について見たい。それは80年代モッズが、自分たちの描く60年代モッズの理想や「ライフスタイル」を、「今でも重要な」ものとして位置づけていたことだ。彼らの言動においては、60年代モッズの暮らしは一度終ってし

まったが、その「モダニズム」は今でも重要だとされた。例えば先に引用したウォレルは、60年代モッズの「ライフスタイルにおける、クールで清潔に、そしてシャープに見せる素晴らしい技術は今も重要なのだ」と述べていた。また *Pt* の編集者マーゲットソンは、ウォレルと同じく「クール」という表現を用い、*Pt* の誌面を「クールかつスマートでいよう（いつだって）」(25) という呼びかけで締めくくっている。さらに *LA66* の編集者キンチは同誌の「祈祷」(The Sermon) と題した序文で、次のように述べる。「モダニズムは生きているし、あるレベルでこれからもずっと生き続けるのだ。だから団結しよう。我々はしたいようにできる。我々が恐れるものは何もないし、隠すべきものも何もない。それが我々の人生なのだ。それを生きてやろう」(Iredale and Kinch 2) と。さらに1985年に催されたイベント、「ナショナル・モッド・ミーティング」でスピーチを行ったあるモッドは、服飾や音楽の産業に対しモッズのとるべき態度について次のように述べている。彼は「[大手]音楽プレスの言うことなんて我々には何でもない。我々はそれを無視すればいいのだから；我々が自分たちのバンドを応援している限り、レコード会社だって我々をコントロールできない。商業的な服飾産業だって、我々にユニフォームを着させるという訳にはいかない——我々はガラクタ市を最良し [patronize “jumble sales”] 続けるし、必要なら、裁縫の仕方だって覚えるさ」(Reynolds 12) と述べる。ここでは古い商品を蒐集する「ガラクタ市」に加え、前段で紹介した産業に支配されない生活という語りも見られる。このように彼らは、一度廃れたモッズの行為や理想——80年代モッズが理解した意味での——に60年代とは違う文脈の中で重要性を与えていた。

ここまで80年代のファンジンにおける、60年代の商品やモッズの描かれ方に注意を向けてきた。80年代モッズの言動には次のような認識が共通して見られた。すなわち、60年代モッズの暮らしや商品——音楽、服、俳優など——は、流行の終焉で一度は廃れたが、彼らの行為は新しい生活への可能性を同時にはらんだものであって、その理想は80年代においても実現すべき重要なものとして捉えられていた。

ここで前節の最後で設定した問題について検討したい。80年代モッズたちは、蒐集した60年代の商品を前にして、それらに60年代のモッズたちが抱いたよりよい生活への望みを呼び起こしたのだろうか。まず3つの留意点を述べねばならない。最初に、80年代モッズが蒐集した古い商品を実際に使用——衣服の着用やDJイベントでレコードを使う等——していたことは無視できない。彼らの蒐集の対象はもはや新品の商品ではなかったが、全く使用に耐えない状態ではなく、彼らがそれらに使用価値を認めた点は確かだ。次に、本稿で見た80年代モッズが、60年代モッズの「新しい生活」についてどのように認識していたかも考慮する必要がある。80年代モッズは、60年代の

モッズの消費行動を、実現せずに潰えた、よりよい生活に向かうものというより、それ以前とは異なる新しい暮らしに発展し、「新しい生活」をいくらか実現させたが、結局は流行の終焉で潰えてしまったものとして捉えていた。

最後に、ファンジンの部数や購読者について考えれば、80年代モッズの言動がもつ社会的な影響力は極めて限定されていたと言える。しかし、80年代のファンジンで語られる60年代モッズ像が、50年代後半以降イギリスで盛んに語られた「今までになかった生活」の物語の追認として、読者に受け取られた可能性は認識しておく必要がある。もっとも、この点に関しては、80年代世代に強い影響を与えた本の内容についても指摘しておきたい。それは、前節で触れた60年代世代の一人バーンズによる1979年発表の『モッズ!』だ。確かにバーンズはモッズの出現を、「こんなに生活がよかったことはなかった」というフレーズに象徴される時代に位置づけていた。とはいえ、同書でのバーンズの語りはそれほどナイーブでもない。彼は、50年代から60年代について、イギリスが米ソに次ぐ最高の国だと思い込んでいた「ひとりよがり」で、実際の世界情勢に「直面しようとしなさい」時代だったと振り返っている。そして当時の若者たちの関心事は兵役の廃止と分割払いのクレジット制限の緩和くらいだったとしている(8)。同書の影響力の強さを考えれば、80年代モッズが60年代の「今までになかった生活」の物語をナイーブに信じ込んでいたわけではないと言えよう。

我々はこれらの点を考慮する必要がある、ベンヤミンのなコレクター像は80年代のモッズと単純に一致するわけではない。しかし本稿で紹介した80年代モッズは、一度人々から見放された60年代の商品を蒐集し、それらがかつてもっていた商品としての価値とは別に、それらの消費がもっていた、よりよい生活へのポテンシャルを見出していたと思われる。彼らが蒐集物の中に見出したのは60年代のモッズたちのよりよい生活への志向であったと思われる。

## まとめ

本稿は、70年代後半以降イギリスにおける若い世代の間に見られた60年代モッズへの関心と彼らの一部の言動を取り上げ、かつては流行の商品の消費であった事象に、「ライフスタイル」の発展という新たな意義を付与しようとした点に注目した。

これらの事例は、第一節で言及したBSの一人、チェンバースが示したようなリバイバル観の再考を促すものと思われる。彼は1987年に、時間軸が失われたかのように過去の事物が様々な商品のモチーフとして溢れる「ポストモダン」な現代において、リバイバルには歴史的なモメントを再発見し、正確に引用するという意義は失われつつあると述べていた。しかし、我々が見た80年代半ばのモッズは、60年代を過去の歴史的なモメントとして認識していた。そして彼らの蒐集物に関する語りには、過去

の商品に人々が抱いたが、次に出てきた別の商品の流行で潰えた、よりよい生活への可能性を救い出すという面があったと思われる。チェンバースはリバイバルを、「レトロさ」を売りにした新しい商品の消費だけに限定はしていないが、彼は我々が見たような、過去の商品の蒐集という事象を見落としていたのではないか。

そうだとすれば、第1節で触れた商品の消費を伴うサブカルチャーの捉え方に関しても、本稿で見た80年代モッズの事例は示唆を含んではいないだろうか。ソートンに代表されるように、BS批判派たちはサブカルチャーに何らかのよりよい社会へ向けての可能性を見出すことにいくらか疑問を投げかけてきた。こういった批判は、サブカルチャーの「内情」に目を向けることを我々に促したという点では、確かに意義あるものであった。しかし商品の消費を伴うサブカルチャーには、人々が置かれた状況とは違う、よりよい生活を志向するという契機もあるのではないか。そして商品の消費が持っていた、実現されずに、あるいは部分的にしか実現されずに、潰えてしまったよりよい生活への可能性を見出すことも我々にはできるのではないだろうか。もっとも、その可能性は商品の消費をしている当の本人たちが意識する所ではなく、後の注視者——それは蒐集家であれ、研究者であれ——がそのようなものとして捉えたときに浮かび上がるものだという認識も必要だ。

本稿で扱えなかった点もある。この時期にはモッズの他にスカ音楽のリバイバルなどもあり、チェンバースに上のように語らしめた程に、リバイバルはこの時代、よく見られる事象だったと推察される。今回はモッズのそれに注目したが、他のリバイバルとも比較する必要がある。また本稿は80年代のイギリスにおける社会問題等については若干の言及にとどまり、さらにイギリスにおける精神史や、サブカルチャーの誕生を可能にした外部状況についての考察は行えなかった。今後これらを含めて調査を進めたい。

## 注

1. ファンジンとは「ファンマガジン」の略で、音楽やスポーツのような特定の事柄に関心を持つ人々に、比較的限られたルートで売られる同人誌である。
2. この言葉についてCSでは議論を呼んできた。BSで「サブカルチャー」は社会における支配的な集団のものと異なる生活様式として定義されたが、すぐ後で見ると、「サブカルチャー対支配的文化」という捉え方への批判もある。しかし本研究に関していうと、筆者がコンタクトを持つ80年代モッズは、「サブカルチャー」という言葉を自ら使う。これには、CSの成果の影響や、ジャーナリズムにおけるこの言葉の使用による影響が考えられる。本研究は「サブカルチャー」の特徴の記述のみを最終的な目的とはしないが、ここでは、「高級文化」とは見なされない行動の様式や意味の体系として定義する。

3. もっとも、ある「界」が「界」として成立する際には、「界」に属さない人々を、その「界」とは違うものと見なす、否定的な契機があるのではないかと問うことも必要だ。つまり、「界」と他の「界」の間には単純な「差異」なるものがあるだけなのだろうか。そもそも「界」が他の「界」を否定的に捉える契機がなければ、「サブカルチャー」や「クラブ・カルチャー」という言葉自体が不要になるのではないだろうか。しかしこの問題には本稿ではこれ以上立ち入らず、稿を改めて検討したい。
4. 以下本稿における英語文献の日本語訳は筆者による。なお引用文中の「[ ]」内は筆者によるもので、日本語は筆者による補足であり、英語は原文の表記である。
5. 80年代モッズの代表的なバンド、ザ・ジャムによる1978年発表のアルバム『オール・モッド・コンズ』の成功もリバイバル・ブームのきっかけの一つとして考えられる。
6. 社会的なイシューに対しモッズが関心を持ったことを示す例外的なケースもある。例えば、85年頃のイギリスではアフリカでの飢餓が関心を集め、ミュージシャンたちがチャリティ・イベント、「ライブ・エイド」を開催したが、この後には、60年代と80年代のモッズのミュージシャンたちが「モッド・エイド」と呼ばれる企画を立ち上げ、レコードの売り上げを寄付している。本稿では取り上げないが、ファンジンでは、これに関するモッズたちの言動がいくつか見られる。
7. 70年代末からのこのリバイバルは、CSのサブカルチャー論で盛んに論じられた人種や民族というテーマを考える上でも、考察すべき事例を含んでいる。先に触れたように、1950年代後半以降の英メディアでの「人種」や「移民」のネガティブな表象は、BSの研究者たちにより批判された。この状況への介入の試みとして、ホールらは、失業中のアフリカ系の若者の行動を「黒人ワーキング・クラスの文化」として積極的に評価し、この時期のイギリスにおける社会的な事象が必ずしも経済だけでは決定されず、「人種」も重要な要因であると指摘していた(Hall et al 394)。ホールらの試みには政治的な意義があった一方、80年代モッズの中には、アフリカ系やアジア系の人々もいた。言うまでもなく、モッズになるには、一定の商品を探し、購入し、維持する経済的な余裕が必要だ。様々な民族的出自のモッズの存在は、経済的な階級とサブカルチャーの関係の重要性を今一度示している。
8. チャリティ・ショップとは主に中古物品を売り、収益を慈善事業に用いる事業である。すぐ後に引用する「トニ」はその例としてオクスファム Oxfamなどを挙げる。
9. 本稿ではインタビュー相手のプライバシー保護のため仮名を用いる。また付録を用いてインタビューの詳細を記すべきところだが、紙幅の制限があるため割愛する。
10. 筆者のベンヤミン理解はスーザン・バックーモース(1989)に多くを負っている。
11. モッズの間で売られたファンジンの、メディアとしての特徴について若干記しておく。本稿が取り上げるファンジンは、60年代モッズや80年代のバンド、クラブ、あるいはそれらと関係のあるアメリカのR&Bなどに関する情報を掲載したもので「モズジン」(modzine)と呼ばれる。その一般的な形態は、白黒で印刷された20から26枚ほどのページを、ステープラーで綴じたものだ。これらの編集は大抵一人か二人で行われ、編集者の多くは男性だが、女性一人もしくは男女二人の場合もある。モズジンは70年代末には既にクラブなどで売られており、出版タイトルの数がピークを迎えたのは80年代半ばと推測される。現在ではインターネット上のウェブサイトの増加でかなりのタイトルが減っている。とはいえ、ファンジンは現在の我々が80年代モッズ、あるいはモッズに高い関心を持つ人々による、当時の言動に触れることのできる数少ない文献だ。掲載記事を書いていたのは編集者と複数の寄稿者だった。モズジンはイギリス各地で発行され、タイトル数はロンドンが一番多かった。読者は返信用封筒を用いて全国からいくつものタイトルを取り寄せており、読者から編集者に宛てた

手紙がよく誌上に掲載された。

12. 『アブソリュート・ビギナーズ』は正確には59年発表の作品であるが、80年代モッズが『007』や『ジェネレーションX』といった60年代の書物を手に入れて読んでいた事例はある。筆者の知る範囲ではトニや、別のカーディフ出身の80年代モッド（仮名「ケン」）も同様の経験をしている（ケン、男性、カーディフ出身）。トニはそういった小説が「60年代の人たちの考え方」を教えてくれたと回想する。
13. また先に言及したPt掲載の60年代モッドへのインタビューにおいて、マーゲットソンの「1965年というのはどんな年でしたか」という質問に対し60年代モッドは次のように答えている。彼は「[自分がモッズだった]時代は素晴らしくて、俺たちの誰も、それが終わってしまうなんて考えもしなかった。俺たちはみんな世界を変えることができると思っていたんだ。66年には、まるでそんな時代は決して終わることがないかのように俺たちは考え出していたよ。でも全てが変わりつつあった。そして俺たちは何が起ころうともそれに気付かない程に酔いしれていた [stoned]。[……]」(15)と述べる。この「世界を変えられると思っていた」という発言は、あくまでこの60年代モッドの回想であり、それが実際に60年代における彼の思いだったのかは判断できない。また、この記事では聞き手のマーゲットソンは、この発言に関しコメントや何らかの位置づけをしていない。しかし、80年代モッズの有名なDJであるマーゲットソンが蒐集したこの発言は、80年代における60年代モッズ表象に影響力を及ぼしたものと思われる。
14. ちなみに『アブソリュート…』の主人公は、ジャズの世界について「誰も、どんな階級の出身だとか、人種だとかを気にしない」(MacInnes 61)と賛美する。同書では、当時のイギリス社会における人種差別も扱われており、アフロ-カリブ系の友人を持つ主人公は、差別に反対する立場をとる(134-6)。
15. この他の例としては、先に引用した部分でF.ウォレルが、60年代の「モッド・ムーブメント」を「コマーシャルリズム」により潰えたものとして、つまりそれ以前の「ムーブメント」を資本に支配されなかったものとして捉えていたことも思い出したい。

## 引用文献表

- ベンヤミン、ヴァルター『パサージュ論』今村ほか訳（岩波書店、2003）第1-2巻  
—「歴史哲学テーゼ」野村修訳『ヴァルター・ベンヤミン著作集1』（晶文社、1969）：111-31  
A.J.C. “Bookwise.” *Hipster* 2 (1985): 13.  
Barnes, Richard. *Mods!* London: Plexus, 1991.  
Buck-Morss, Susan. *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and Arcades Project*. Cambridge: MIT Press, 1989.  
Chambers, Iain. “Maps for Metropolis: A Possible Guide to the Present.” *Cultural Studies* 1.1. (1987): 1-21.  
Cohn, Nik. “Mods.” *The Sharper Word: A Mod Anthology*. Ed. Paolo Hewitt. London: Helter Skelter, 2002, 137-43.  
Dougan, John. “Objects of Desire: Canon Formation and Blues Record Collecting.” *Journal of Popular Music Studies* 18. 1. (2006): 40-65.  
Feldman, Christine. “Making Time: The Retro-forward Logic of Mod Style.” MA Thesis.



- Georgetown Univ. 2003.
- Guffey, Elizabeth E. *Retro: The Culture of Revival*. London: Reaktion Books, 2006.
- Hall et al. *Policing the Crisis: Mugging, the State, Law and Order*. London: Macmillan, 1978.
- Haynes, Adrian. "Scooters." *Hipster* 2 (1985): 10.
- Hebdige, Dick. *Subcultures: The Meaning of Style*. London: Routledge, 1988.
- Iredale, Wayne and Nicholas-Joel Kinch. "The Sermon." *Life After '66* 1 (1984): 2.
- Ken. Personal interview. 4 June 2007.
- Kinch, Nicholas-Joel. "Album Reviews." *Life After '66* 1 (1984): 14-15.
- MacInnes, Colin. *Absolute Beginners*. London: Allison and Busby, 1959.
- Margetson, Ray. "The Mod of the Sixties: An Interview with Stevie Simpson." *Patriotic* 6 (1982): 14-16.
- Muggleton, David. *Inside Subculture*. Oxford: Berg, 2000.
- Reynolds, Brian. "The National Mod Meeting." *In the Crowd* 18 (1986): 12-3.
- Quito, Amos. "Review: I Don't Give Two Fucks about Your 60's Reviews" *Fabulous* 2 (1985): 5-6.
- Rawlings, Terry. *Mod: A Very British Phenomenon*. London: Omnibus, 2000.
- "Small Faces: Personal Files." *Extraordinary Sensations* 9 (1982): 21.
- "The Stax/ Volt History." *007* 4 (1985): 7-8.
- Thornton, Sarah. *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*. Hanover: Wesleyan UP, 1996.
- Toni. Personal interview, 30 May 2007.
- Verguren, Enammel. *This Is a Modern Life: The 80s London Mod Scene*. London: Helter Skelter, 2004.
- Warrell, Fiona. "Chic et Chatter – for the Chicks." *Hipster* 2 (1985): 14.